

# 第8回桃山学院大学図書館書評賞受賞作

## 【 佳 作 】

東 穂高（経営学部4年次生）

池上 彰『世界を変えた10人の女性：お茶の水女子大学特別講義』 文藝春秋 2013年

## 【 総 合 講 評 】



図書館長 法学部教授 瀧澤 仁唱

本を読めば、今まで自分の知らなかった先人の知恵を簡単に自分のものにできる。これは今さら言うまでもない、昔から言い古された言葉である。後世の者は、先人の知恵を基にして未来を見ることができるから、先人の犯した失敗をせずに進んでいくことができるはずである。「錬金術」では金(きん)が作れない、つまり化学合成では元素である金を作れないというのは、「錬金術師」たちの数限りない多くの失敗から生み出された知識である。だから、後世の者は「錬金術」など信じない。後世の者は、先人の肩の上ののって未来を見ることができるから、先人の知識を無駄にしないために本を読む。

しかし、本をただ読んでいればそれで済むわけではない。上で「失敗をせずに進んでいくことができるはずである」と書いたように、先人の知恵に学んだはずの後世の者が数限りない失敗をしてきたことも事実である。本をただ無批判に読むだけではそこから得られる知識は発展しない。間違った内容の本を信じて行動すれば大きな災いをもたらす。それも多くの歴史が示してきた。個人の過ちなら大した被害がでないが、それが政治につながるととんでもないことになる。だから本の内容の丸飲みは危険である。

その本の内容がどういうものであり、さらにより良いものにするには、批評が必要である。それには本の内容を自分なりに咀嚼し、それを基に批判を加える必要がある。本の内容把握と的確な批判が書評には絶対に必要で、それが学問の発展につながる。その批判は、昨今ネットに頻繁に見られるような、揶揄や揚げ足取りであってならないのはもちろんである。批判と揶揄・おちゃらかしを同じものとする者がいるので念のため述べておく。

高校までは「生徒」(ドイツ語でいうと Schüler(in))と呼ばれるが、大学以上の「学生」(同じく Student(in))との違いは何か。生徒が「学ぶ」者であるのに対し、学生

は「研究する」者であることである。「学ぶ」の語源は「マネブ」で、一説によればひたすらまねることである。「研究」には学んだ上で、疑うという視点、すなわち批判の視点が必要である。本の内容の咀嚼の上に、その内容を検討・批判し、それをより良い内容にしていくための記述が書評である。重ねていうが、本の内容の紹介だけでは書評にならず、その紹介を基に自分の感想を書くだけでは感想文にすぎず、その本の内容を批判・検討してより良い本の内容にするための文章が書評である。

我々図書館委員は寄せられた書評を少なくとも以上のような視点からそれぞれ検討した。以下、やや辛口な表現を御寛恕いただくとして総合講評を述べる。応募された「書評」の多くは本の紹介に過ぎなかったり、単なる感想文であったりした。一応書評といえそうなものについては、いやな表現だが、ネット社会で横行している剽窃はないか、その「書評」の内容を点検した。これは図書館事務課員の点検作業によるところが大きい。最終選考では、応募された「書評」とその本の内容を逐一照らし合わせ、内容が妥当かどうか図書館委員が点検し、授賞すべきかどうか検討した。

今年の書評応募点数は42であり昨年の47よりさらに減った。しかも、入選は残念ながら佳作1点のみの惨憺たる結果に終わった。選考にあたった図書館委員の意見をおおまかにまとめれば、書評の域に達していないものがほとんどであったということである。本の内容をただまとめただけの「感想文」が多く、とうてい書評にはなっていないものが多かった。いちおう書評になっていると思って、その本を読んで、書評になっているか子細に検討してみると、はじめの章だけ読んで書評を書いているとしか思えないものがあり、最終選考からその「書評」をはずしたこともある。正直いってもう少し「歯ごたえ」のある書評があるかと思ったが、残念ながら一つもなかった。

佳作となった池上彰『お茶の水女子大学特別講義 世界を変えた10人の女性』(文藝春秋、2013年)が今年度唯一の佳作となった。同書の内容は手際よく紹介されていたけれども、「書評」としては残念ながら佳

作の水準にとどまった。評者の今後の精進を切にお願いするしだいである。

最後に来年度からの書評賞の応募者の変更について述べておく。来年度は、書評賞の応募者に学生(大学院生を除く)に加えて聴講生および市民利用者も含めることにした。より多数の方々が応募しやすいようにしたのである。しかし、これはある意味で「賭け」である。なぜなら、学生以外の応募者が優秀作となり、学生の書評が排除される可能性がないとは言えないからである。例えとしては適切さを欠くかもしれないが、ラグビーの学生王者と社会人王者が最後に日本一を競うために毎年闘ったけれども、社会人王者が圧倒的に強くて試合にならなくなり、決定戦方式を変えざるをえなかったことが私の頭をよぎる。学生の優秀選手から選抜された者が社会人チームにどんどんたまっていくから、社会人王者のチームが勝つのは目にみえていた。社会人や聴講生ばかりが入選して学生が書評賞から排除されてしまうことが危惧される。そのようなことがないようにするためには、書評を書く際に教員がどう指導しうるかも問題になってくる。リベラルアーツとしての側面を強くもっているからこそ、書評のもつ意味が大きいことも銘記すべきである。

## 【 佳 作 】



池上 彰 『お茶の水女子大学特別講義  
世界を変えた 10 人の女性』

東 穂高 (経営学部4年次生)

著者の名前はインターネット上で良くも悪くも評判だったので興味がわき、この本を手にとった。タイトルを一目見た瞬間に様々な思いが頭を駆け巡り、ただ単純に読んでみたい、と思えた。著作は実際に著者がお茶の水女子大学で行った講義の内容に、加筆修正を施し文章としてまとめたものである。教授である池上彰が、受講学生に毎回1人の女性を紹介し、それに対し学生たちが質問をしていく授業形式で書かれているため、最初から学生へ教える形となっているのでとても読みやすい文章となっている。最後には学生のレポートを紹介し、それを学生ら自身が批判、評価する事で理解を深めている。「世界を変えた10人の女性」というタイトルであるが、「世界を変えた10人」ではない所に真っ先に目を引かれる。本著で著者も述べているが、「世界を変えた10人の男性」では成り立たなく、女性と限定している所に社会の問題点が浮き彫りになっているといえるであろう。現代では様々な改革や時代の流れで、男女共同参画社会が普通となっているが、昔から日本だけではなく世界各地で、女性は弱者として虐げられていた。その立場を変えてきた人々の思いを汲み、学んでいく事で、いまだ残る性差別

問題に対し正面から向き合えるようになるであろう。私は平成の時代に生まれ、物心がつく時にはすでに女性差別は少なくなっていたので、女性が過去どのような立場であったかは文章でしか知ることが出来ない。著作で紹介されている女性解放運動家のベティ・フリーダンや、日本国憲法の女性の権利の項目を担当したベアテ・シロタ・ゴードンなどは、直接的に女性の権利を勝ち取った人物である。つまり、女性の「世界」を根本的に変えた人物であるといえる。

著作は性差別問題だけではなく、多用な立場の女性が台頭し、世界を変えていく様を示している。例えば他に、マザー・テレサやナイチンゲールも紹介されているが、こちらは現代でも有名である修道女と看護師である。彼女らは自分が弱い立場であるのに、さらなる弱者を救おうとした存在である。この2人に関しては説明もいらぬほどに有名である。現代に生きる私としては、レディーファーストや女性専用車両など、自分たちを弱いと思い込んだ女性たちが権利をもぎ取っているという印象を持ってまいがちなため、どうしても女性解放運動などは理解し難いものだと考えてしまう事がある。これは彼女らによって世界が変えられ、女性の権利が「普通」となっているために考えてしまうものであると理解はしているが、著作では現代においての女性の立場の説明などが不足していると感じた。世界を変えた10人の女性を紹介するだけでなく、今の時代の「世界を変えられた」若い女性を取り上げて比較する事などがあれば、理解が深まったであろう。

最初に述べた通り、著作は実際に大学で行われた講義を文章にまとめたものである。教鞭をとっており、この本の著者でもある池上彰は批判的な人で有名である。それゆえ、ただ世界を変えた10人の女性を「ああ、素晴らしいかった」と紹介するのではなく、一人ひとりの時代背景や生まれ、立ち位置などを考慮した上で評価を下している。

これも、ただ評価をするだけではなく、まず疑うことからはじめ、どれだけいい人であったとしても、学生にはその情報を鵜呑みにさせない。自分の考えはこうだけど、皆さんは自分で見たものを信じ、考えてください、ということである。著作を読んでいると、思考を先回りされて、本当に自分も講義を受講している気分になった。この多面的な見方を考えるのは、どんな物事に対しても大切であると教えられた。

今回紹介されている人物の一部を抜粋したが、著者は意図を持って10人を順番に紹介したのであるから、是非読んでいただきたい。その後のレポート講評会も含め読むことで、著者だけではなく受講生の考えやそれに対する評価を知ることが出来る。著作を読むことで本を読むことだけではなく、授業を受ける態度や生活全般にまで多面的に見る事を学べるので、得るものも大きいだろう。

